

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520034
 研究課題名（和文）プラトン対話篇におけるミュートス（神話）の哲学的機能と意味をめぐる総合的研究
 研究課題名（英文）General Research on the Philosophical Functions and Meanings of the Mythos(Myth) in Plato's Dialogues
 研究代表者
 中澤 務 (NAKAZAWA TSUTOMU)
 関西大学・文学部・教授
 研究者番号：10241283

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、プラトンの対話篇に頻出する表現形式であるミュートスが、プラトン哲学の中で果たしている哲学的機能とその意味を、プラトン哲学全体にわたって総合的に分析することにある。この目的を達成するために、本研究では、ミュートスを大きく「終末論的ミュートス」と「宇宙論的ミュートス」に分類し、それぞれの該当作品におけるミュートスの語りの文脈の個別的分析作業（レベル1）を通して、それぞれのテーマの中でのミュートスの役割を解明し（レベル2）、最終的には、プラトン哲学全体の中でのその位置づけを総合的に明確にした（レベル3）。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to analyze comprehensively the philosophical functions and meanings of Plato's mythos (myth), which is Plato's usual philosophical method. To achieve this purpose, I first categorized Plato's mythos into two types, i. e., 'the eschatological mythos' and 'the cosmological mythos'. In the first step of research, I analyzed each dialogue in which the arguments of mythos emerge one by one. In the second step, I considered the philosophical functions of mythos in each philosophical theme. In the third step, I tried to make clear the general role of mythos in Plato's philosophical method.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 ・ 哲学・倫理学

キーワード：哲学、西洋古典、プラトン、ミュートス、神話

1. 研究開始当初の背景

プラトン哲学の注目すべき特徴の一つである「ミュートス」と呼ばれる表現方式は、

真理を伝える物語（神話）として、通常は対話のクライマックスにおいて、ソクラテスによって物語られるものであり、互いに関連し

ながらも、それが取り扱うテーマは非常に多様である。

ミュートスによる真理の提示という哲学的方法は、ロゴスによる論理的探究を主体とするプラトン哲学にとって、どのような機能と意味を持つのであろうか。

この問題設定は、プラトン哲学研究において、表舞台に出ることはあまりないが、実は、プラトン哲学の根幹に関わる重要な問題であると考えられる。というのも、ミュートスの位置づけとして、下記のような可能性を考えることができるが、いずれの立場に立つかによって、プラトン哲学の中心に位置する、ロゴスの探求の位置づけ自体が、大きく変化することになるからである。

- (1)ミュートスは、プラトンの詩的想像力の産物であり、哲学的意義はない。
- (2)ミュートスは、ロゴスによる説明では真理を理解できない一般大衆向けにプラトンが創作した、説得のための道具(=高貴な嘘)である。
- (3)ミュートスは、ロゴスの探求により到達した真理を、全く別の方向から再記述しようとしている。
- (4)ミュートスは、ロゴスの探求では到達できない、究極的な真理を述べたものである。

研究史では、(1)から、(3)または(4)へと向かっていく明確な流れを見ることができる。ミュートスが持つ多様な哲学的意味が次第に自覚され、それぞれのミュートスが埋め込まれている個々の文脈のなかでミュートスが果たしている多様な役割と意義が解明され、ミュートスとロゴスの密接な関係が認識されるようになっていったのである。

本研究は、以上のような世界的な研究動向を踏まえて構想されたものであり、ミュートスがプラトン哲学のなかで果たしている役割と意義を、多様な視点から解明していき、そのような解明作業を通して、プラトン哲学におけるロゴスとミュートスの複雑な関係性を、立体的に浮き彫りにすることを目指すものである。

日本では必ずしもこの問題の重要性が十分には認識されておらず、欧米に匹敵する総合的なミュートス研究もあまりみられない。こうしたわが国における欠落を補完し、独自のミュートス研究を確立するために、本研究は構想された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、プラトン哲学の中でミュートスが果たしている役割とその意義を、多

様な視点から解明し、それを通して、プラトン哲学におけるロゴスとミュートスの関係を、多角的な視点から、総合的に解明することにある。

プラトンのミュートスは、多層的な機能と意味を持っている。一方でミュートスは、個々の対話篇の個別的な議論の展開の中に埋め込まれ、その文脈の中で独特の役割を担う。しかしまた、それは、個々の対話篇を超えた共通の普遍的内容を持つ。これらの個別的な側面と普遍的な側面の両者を視野に入れつつ、有機的な研究を展開していかねばならない。

こうした研究を効率的に展開していくには、研究の内容を幾つかのレベルに区分し、各レベルを有機的に連携させながら、計画的に研究を遂行していく必要がある。

本研究では三つのレベル(後出)を想定する。これらのレベルにおける個別的な研究をまず遂行し、その成果を有機的に関連させて、研究を遂行することにより、プラトン哲学においてミュートスが果たしている多様な役割を浮き彫りにすることが、本研究の最終的な目的となる。

3. 研究の方法

本研究では、上述のように、研究のレベルを次の三つに区分し、各レベルを有機的に関連させながら、研究を展開していった。

レベル1:各対話篇の文脈に即した、ミュートスの機能と意味の分析

ミュートスが登場する代表的対話篇を取り上げ、各対話篇のテーマと対話の文脈の中で、ミュートスが果たしている哲学的機能を分析していく。

レベル2:ミュートスが扱う二大テーマに関する諸問題の解明

次に、ミュートスの共通的要素に注目し、相互に比較することで、プラトンのミュートスが取り扱う、霊魂や宇宙を巡る問題を解明する。

レベル3:プラトン哲学全体におけるミュートスの諸機能と意味の総合的な解明

最終的に、プラトン哲学におけるミュートスの役割について、総合的な解明をおこなう。本研究では、基本的に前述の(3)(4)の立場に立ちつつ、ロゴスの探求をミュートスがいかに補完し、プラトン哲学全体を完成させるのかを、できるだけ具体的に考察していく。

本研究では研究対象として次の一覧表のように、作品とテーマを選定し、そのポイントを分類した。

主題	該当する対話篇	ポイント
終末論的ミュートス	『ゴルギアス』	・ 宗教思想、とりわけ、シャーマニズム（オルフィズム）とミュートスの関係性
	『メノン』	・ ピュタゴラス派の思想との影響関係（とりわけ想起説との関連）
	『パイドン』	・ ソクラテスの宗教思想とミュートスとの関係
	『饗宴』	・ プラトン自身の宗教思想とミュートスとの関係
	『国家』	・ 倫理思想の正当化においてミュートスが果たす役割
	『パイドロス』	・ 哲学的理論（想起説・イデア論）との関係 ・ 哲学的魂論（三部分説）との対応関係
宇宙論的ミュートス	『パイドン』	・ ピュタゴラス派やエンペドクレスなど、ソクラテス以前の哲学者たちの思想との影響関係
	『政治家』	・ 政治思想とミュートスとの関係
	『ティマイオス』	・ 理論（ロゴス）とミュートスの関係。とりわけ『ティマイオス』におけるロゴスとミュートスの関係性
	『クリティアス』	・ アトランティス神話を巡る伝承とミュートスの問題
他	『プロタゴラス』	・ プロメテウス神話（ソフィスト思想とミュートスの関係）

研究の遂行にあたっては、これら一覧表に挙げた対話篇を逐次取り上げ、そのポイントに即して、まずレベル1における個別的研究をおこなった。研究の進行に従い、徐々にそれらの対話篇の相互関係を、主題ごとに解明していき（レベル2の作業）、最終的には、レベル3において、全体のまとめをするというかたちで、研究を進めていった。

4. 研究成果

まず、レベル1における各作品の個別的研究において行った具体的な分析および得られた知見は、次の通りである。

(1)『ゴルギアス』、『メノン』、『プロタゴラス』などの初期対話篇において、ミュートスは、弁論術や快楽主義の批判との関連で登場する。これらの議論の中で、ミュートスを使った議論が果たしている役割について、個々の議論の文脈に即しつつ、分析を行なった。この分析の結果、いずれの対話篇においても、ミュートスによる議論は、ロゴスによる議論を補完し、そこにはない新たな主張をおこなっていることが、予想通り確認された。

(2)次に、『国家』に焦点を当て、イデア論などの形而上学的問題、魂の三部分説等の哲学的問題を巡る議論、および、正しい者が幸福であるという倫理的議論のそれぞれについて、ミュートスがどのように機能しているかを分析した。ここでも、ミュートスは、プラトンのそれぞれの議論の中で必要不可欠の役割を果たしていること、とりわけ、倫理的な議論においては、いわゆる「ギュグスの指輪」のミュートスが、プラトンの論点を理解するうえで重要な役割を果たしていることが明らかとなった。さらにまた、詩人追放論とミュートスとの関係などの問題についても検討が加えられた。

(3)次に、宇宙論的ミュートスの主題において、『政治家』を取り上げ、宇宙の周期と逆転を巡るミュートス（268d-274e）の詳細な構造分析、および対話の中心テーマ（政治家の定義）の議論の中でミュートスが果たす役割に関する分析をおこなった。ここでは、プラトンの政治理論の議論においても、ミュートスが理想的政治のあり方を考察するうえで、非常に重要な役割を果たしていることが確認される結果となった。

(4)次に、『ティマイオス』において全面的に展開されている、ミュートスの宇宙論の構造分析をおこなった。また、さらに、この作品の中で、ミュートスとロゴスの関係がいかに把握され、それが実際の議論の中でどのように分析できるかについても一定の考察を加えた。ここでは、プラトンの宇宙論がロゴスとミュートスの融合物であり、両者は補完的に機能していることが確認された。

(5)次に、『クリティアス』におけるアトランティス神話の分析を行なった。とりわけ、アトランティス神話が語られる意図について、プラトンの政治哲学との関連で考察を行い、そこでミュートスが果たす意味を考察した。考察の結果、プラトンがアトランティス神話を展開する背景には、プラトン自身の理論的な政治哲学と、理想社会のイメージが存在していることが明らかにされた。

以上の研究を通して、プラトンの各作品におけるミュートスの役割は多様であり、作品ごとにその役割も機能も異なっているが、しかし、いずれの作品においても、ミュートスは独自の哲学的役割を持っていることが明らかになった。(なお、これらの成果のうち、『プロタゴラス』・『ゴルギアス』・『国家』に関わるものについては、その一部が、論文②～⑤において取り扱われている。)

さらに、これらの個別的研究に平行しておこなわれた、レベル2における研究では、ミュートスの二大テーマに関して、それぞれのテーマごとに、その根幹に関わる主張がミュートスを通して考察されていることが明らかとなった。

まず、「終末論的ミュートス」においては、該当する対話篇において語られるミュートスの多くは、宗教的思想との関係において、人間が理論的説明によっては到達できない魂の不死や、倫理的生の褒章をめぐる説明をしており、倫理的問題の究極的な場面において、理論的説明では説明しきれない確信を表明するための方法であることが明らかになった。

また、プラトンは、政治のあり方について語る際に宇宙のあり方との対応関係を問題にし、コスモロジーのあり方にそくした理想的な政治を語るが、この政治的考察において、「宇宙論的ミュートス」ミュートスがなくてはならない役割を果たしていることが明らかにされた。

こうして、各作品と、それぞれのテーマにおけるミュートスの議論の特性が明らかに

なることで、レベル3の課題、すなわち、プラトン哲学におけるミュートスの役割の総合的解明においても、一定の知見を得ることができた。

すなわち、研究当初の予想通り、プラトン哲学におけるミュートスが持つ意義は、「1. 研究開始当初の背景」に掲げた4つの解釈における(1)(2)のように、ロゴス(理論)よりも劣る二次的な説明方式ではなく、むしろ、(3)(4)のように、ロゴスを超えた真理を述べようとしたものであったことが、総合的なかたちで明確となった。

従来の研究には、個々の文脈に捉えられすぎて全体を見失ったり、全体的な意義づけに固執するあまり個別的文脈を無視したりする傾向があったが、本研究の3レベルの設定により、有機的な方法論を取ることが可能となり、バランスのとれた総合的研究を遂行することができ、これによって、従来にはない、さまざまな新しい知見を獲得する結果となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 中澤務、徳倫理学と行為の正しさ、哲学年報(北海道哲学会編)、査読無、56号、2009、1-17、
<http://hdl.handle.net/10112/988>
- ② 中澤務、『プロタゴラス』と『ゴルギアス』における快樂説、ギリシャ哲学セミナー、査読無、6巻、2009、15-30、
http://wwwsoc.nii.ac.jp/gps/Ronshu/2009_2.pdf
- ③ 中澤務、グラウコンとアデイメントスの問い—プラトン『国家』第II巻における”Why be moral?”の問題—、哲学(関西大学哲学会編)、査読有、26号、2008、203-222、
<http://hdl.handle.net/10112/984>
- ④ 中澤務、魂の正義と行為の正義—プラトン『国家』における二つの正義概念をめぐって、哲学(北海道大学哲学会編)、44号、2008、27-46、
<http://hdl.handle.net/2115/35050>
- ⑤ Nakazawa, Tsutomu, The Structure of Plato's Protagoras、文学論集(関西大学)、査読無、57巻1号、2007、45-68、
<http://hdl.handle.net/10112/975>

〔学会発表〕(計1件)

- ① 中澤務、徳倫理学と行為の正しさ、北海道大学哲学会研究発表会(北海道大学)、

2008年12月13日

②中澤務、『プロタゴラス』と『ゴルギアス』
における快樂説、ギリシャ哲学セミナー
研究発表会(千葉大学)、2008年9月14
日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中澤 務 (NAKAZAWA TSUTOMU)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：10241283